

盧溝橋事変勃発前後の中国人日本留学生（一）

— 『留東新聞』事件，『現世界』半月刊事件，引擎出版社のことなど—

小 谷 一 郎*

Ichiro KOTANI

私はこれまで 1930 年代後期の日本における中国人日本留学生の文学・芸術活動に関する掘り起こし作業を進めてきた。本稿もそうした掘り起こし作業の一環である。

ここで問題としたいのは盧溝橋事変の勃発前夜，日中戦争全面化を前に起きた中国人留学生に対する「弾圧事件」に関してである。

昭和 12 年度『外事警察概況』には「左傾抗日思想宣伝に従事せる留東新聞社員の一斉検挙及同幹部の論旨送還」として次のように記されている。

張健冬 四川省江安県 神田区一ツ橋通二ノ

三 留東新聞主幹 元早大生 二七

簡泰梁 四川省富順県 住所右同 留東新聞

編輯発行人 早大生 二六

王瑞符 江蘇省塩城県 麴町区飯田町新井信

雄方 留東新聞社事務員 中大生 三一

右者等は左傾反日思想抱持者にして之が宣伝を為す意図を以て，昭和十年六月留東新聞社を創立，其の事務所を神田区一ツ橋二丁目三番地に置き，同社の目的任務は日支両国の政治，経済，外交，軍事に関する報道並に中国留学生の消息報道にありと称し，合法的に「カモフラージュ」して週刊留東新聞毎号三，五〇〇部を発行し居たるが，漸次其の抱持せる共産反日思想を紙上に表現宣伝するに至り，昭和十一年一月十七日以降発売頒布禁止

差押処分につせらるること十回に及びたるを以て，警視庁に於て其の行動を嚴重に視察中の処近時本国救国会其の他が抗日人民戦線を指導精神とする新聞，雑誌社，其の他より其の機関誌を留東新聞と交換して取寄せ之を同社図書室に備付け，一般中国留学生に自由に回覧せしめ，又唯物論研究会，労働新聞社，消費組合等の本邦左翼団体に新聞を寄贈連繫を図り，専ら左翼反日の行動に終始し，客年十月頃より抗日宣伝を主たる任務とする在上海現世界社と連絡し，雑誌『現世界』を五回に亘り一三五部取寄せ王瑞符をして販売を担当せしめ以て中国留学生間に共産主義並に抗日思想の宣伝に努め居たる事実を探知したるに依り，一月十四日関係者八名を一斉検挙したるが，前記三名は指導的立場に於て活動し其の情状最も重く加ふるに改悛の情認め難きを以て，此の儘在留せしむるのに於ては多数中国留学生の思想行動を左傾反日化せしむるの結果を招来する虞あり滞邦好ましからざるに依り一月二十五日横浜出帆の阿蘇丸にて上海に向け論旨送還せり（注 1）。

副題に掲げた『留東新聞』事件がこれである。だが，この事件の「あらまし」を見ただけでもお分かりいただけるだろう。『留東新聞』事件とは単に『留東新聞』が「左傾化」したためだけで起きた事件ではない。そこには彼らが『現世界』半月刊を日本国内に取り寄せ，販売していたという『現世界』半月刊に関わる事件が関

* こたに・いちろう

埼玉大学教養学部教授 中国近現代文学

係している。以下、私はこれを『『現世界』半月刊事件』と呼ぶことにしたい。このように、『留東新聞』事件は『『現世界』半月刊事件』と連動している。

『現世界』半月刊を刊行していたのは胡一声が社長を務める引擎出版社である。この引擎出版社は後述するように、時の中国人日本留学生、南洋華僑などの「基金」によって設立された中国近代出版史上はじめての出版社である。

すでに他のところで何度も述べてきたように、1930年代後期の中国人日本留学生の文学・芸術活動をリードしてきたのは「東京左連」の人々である。「東京左連」は1933年に起きた「華僑班」事件で活動停止の状況に追い込まれたが、同年冬林煥平たちによって再建された。再建後の東京左連は、日本プロレタリア運動の「挫折」の体験を踏まえた江口渙たちの助言を受け、従来の「非合法的な活動方式から「公開」の「同人形式」による活動スタイルに切り替える。「同人形式」ならば伸縮自在であり、なおかつ活動の「核」ともなり得るとするのがその理由である。だが、それは、自らは「後衛」に退きながら「核」として活動する、という難しい舵取りを迫られることになる。こうした時、彼らの活動の「磁場」となったのが「芸術聚餐会」である。そこから、折からの中国人日本留学生の増大を背景としながら、それこそ豊かな、じつに様々な活動が生まれた。『留東新聞』の創刊、引擎出版社の設立、『現世界』半月刊の発行はその現れでもある。このため、時の日本側官憲はこうした留学生の動きをそれこそ「シラミ潰し」に潰していかざるを得なかった（注2）。

『留東新聞』事件、「『現世界』半月刊事件」は、盧溝橋事変前夜に起きた中国人日本留学生に対する最初の本格的な「弾圧事件」である。

本稿は、こうした『留東新聞』事件、「『現

世界』半月刊事件」、引擎出版社について筆者の調べ得た限りをまとめたものである。

（一）『留東新聞』について

（1）『留東新聞』

『留東新聞』は1935年6月12日に創刊された。発行は「東京神田神保町中華青年会内 留東新聞社」、編集発行印刷人は「傅襄謨」である。「編集兼発行人」は、第11期以降それまでの傅襄謨一人から、「張健冬 傅襄謨 簡泰梁」の三人になる。『留東新聞』は週刊で、毎週水曜日発行、のち金曜日発行となり、定価は一部「五分」、中華基督教青年会、東亜高等予備校、市内の中国関係の書店などで販売されていた（注3）。

『留東新聞』創刊の目的は、「創刊辞」に次のように記されている。

「近代の中日文化関係」は四十年の長きに及び、これまで東京で出版された「学術研究及び時事評論の専門雑誌刊行物」は五十種を越えるが、「留東の消息を伝え、客観的情報、態度を目的とする新聞」は本誌がはじめてであろう。多事多難の時に当たり、本報の「使命」は、留学生間の意思疎通を図るべく、「留東の消息を伝え、合作の機能を促進する」ことにある。このため、「各省要聞」、「団体消息」、「大衆日歴」、「読者信箱」の各欄を設けた。また、昨今中国国内で日本留学生が遊び呆けているなどの誹謗中傷がある中で、「学術精神を發揚する」ことは我ら留学生の恒久の目的でもあり、ために、「文化生活」欄を設け、専門に各同学の研究成果を紹介し、「小小書庫」欄では読書の便に供することにした。我らはまた日本にあつて日本を知り、「純潔な眼光で日中兩國間の一切の歴史關係及び現實の真相を正確に認識しなければならない」。このため、「中日要聞」、「学術論著」、「留東

副刊」を設け、「客観的態度で中日文化を紹介する」ことを「本報使命の第一」としたい(注4)。

このように、『留東新聞』は、「留東の消息を伝え、客観的情報、態度を目的とする新聞」、留日学生の合作、学術の向上、「中日文化の紹介」などを目的とした中国人日本留学生初の「新聞」として創刊される。『留東新聞』の最大の特徴がここにある。

『留東新聞』と同じく「留東」の名を冠した同時代誌に『留東学報』がある。『留東学報』は『留東新聞』の創刊からわずか二週間後の35年7月1日に創刊された。その『留東学報』は、「留日同学的播音室／「留東新聞」現已出版」と題する長文の「囲み記事」で、『留東新聞』の創刊についてこう伝えている。

留学生の数が増大しながら、長らくそこには留学生間を繋ぐ雑誌がなかった。これは「留日学生の前途にとって最大の不幸」で「誰しもがその要求を持っていた」。こうした時、「法大の同学向震、新聞学院の同学傅襄謨、張致中、早大の同学張先奇、簡泰梁等がこのことを思い」、「三十年来留日学生界が持ち得なかった純学生新聞を創刊した」(注5)。

ここに見えるように、『留東新聞』は「法政大学の向震、新聞学院の傅襄謨、張致中、早大の張先奇、簡泰梁等」によって創刊された。創刊の経緯については次節で述べる。

ここに名前が見える向震については、法政大学編『中華民国留日法大同学録』に昭和6年段階で「経済科一年級生」八名の中に「向震 四川 二五 四川萬県裡街徳太豊転碧梧山荘」と見える。また、興亜院発行『昭和十七年度 日本留学中華民国人名調』にも「原籍 四川省萬県」、「上海中国公学大学部」の出身で、昭和10年「法政大学経済学部経済学科」卒業とある。このように向震は、四川省萬県の人で、上海中

国公学大学部の出身、昭和6年、31年に法政大学経済学部に入學し、昭和10年、35年に卒業したらしい。

また「張先奇」とは、「張健冬」とのことではないかと思うが特定は出来ていない(注6)。

(2) 『留東新聞』創刊の経緯

常化知という人がいる。常化知は、「『留東新聞』事件」で張健冬、簡泰梁等と共に検挙された一人である。常化知は、1915年四川省興文県の生まれ、29年四川大学工学院予科在学中に共青团に加わり、30年北京に出て、31年共産党に入黨、その後まもなくして逮捕され、33年保釈になった後、35年夏の末に來日した(注7)。

常化知は回想『『留東新聞』在東京』の中でこう書いている。

1935年初め、東京の四川籍の学生張健冬、傅襄謨(江安の人)、簡泰梁(富順の人)三人が(彼らは国内で共産党組織あるいは進歩的団体に参加し、ある人には逮捕状が出されていた)、時事新聞的な刊行物を出すことを相談した。彼らは多方面から意見を徴収し、特に当時千葉県にいた郭沫若同志の意見と支持を得、最終的に週刊を出すことにし、名を『留東新聞』と定めた(注8)。

このように、常化知は、『留東新聞』の創刊に当たり、事前に郭沫若と相談し、その上で『留東新聞』を出すことにしたという。だが、果たしてそうであろうか。これに対する私の考えはのちに述べる。

この常化知は『留東新聞』の創刊に直接関与していない。常化知が來日したのは『留東新聞』創刊後である。常化知は続けてこう書いている。

私と張健冬は成都で親しく、共に公開の大衆活動に参加したことがあり、同郷で後輩でもあったので、東京へ着くとすぐに『留東新聞』の工作に参加した。その時、簡、傅、張

三人の外に、李仲平、張安国（江安の人）も具体的な工作に参加していた（注9）。

ここに名前が見える張安国に、張安国口述、陳永嘉整理「傳襄謨事略」がある。張安国はそこで次のように語っている。

1935年、郭沫若の支持の下に、何人かの進歩的留学生と連絡を取り、江安の人張劍東、常知化、張安国及び富純の人簡太良、内江の人蘇相華等が『留東新聞』を創刊した。傳襄謨が主編で、張、簡が発行を受け持っていた（注10）。

張安国もまた、『留東新聞』の創刊に郭沫若が関与していたという。そのことはいま別として、この張安国の回想は口述筆記のせいであろう、関係者の名前表記に異同がある。だが、それは中国語の音から、「張劍冬」が「張健冬」、「簡太泰」が「簡泰梁」、「常知化」が「常化知」であることは確かである。

簡伯邨という人がいる。簡伯邨は簡泰梁の弟である。彼は36年頃日本に來日し『留東新聞』に関係した。簡伯邨は回想『『留東新聞』——憶抗戰前的三份『留東』刊物』の中で次のように書いている。

『留新』の責任者は最初が傳襄謨で、その後張健冬と簡泰梁、編集部の実際工作員には簡伯邨、李仲平、呂奎文、積極的に創刊に関与した人にはまた常化知、揚烈、朱劍農等がいた（注11）。

『留東新聞』主編傳襄謨については張安国の口述「傳襄謨伝略」などに詳しい。それによると、傳襄謨は1911年の生まれで四川省江安県の人。25年四川省第三中学に入学したが、27年学生運動に参加したことで除籍になり、その後28年秋北京に出て、北平大学芸術学院実用美術系に進み、図案を学んだ。傳襄謨はその頃から新聞に関心を持ち始め、「四川駐平新聞記者連合会」に参加、卒業後は郷里で美術の教員などを

していたが、33年に來日している（注12）。

「傳襄謨伝略」にはさらにこうある。

（傳襄謨——小谷、以下同じ。）は、張劍東（張健冬）、簡太良（簡泰梁）等と共に上海を経由して日本に留学し、東京の新聞学院に入った。

傳襄謨、張健冬は四川省江安の出身、簡泰梁も同じ四川省の富純の出身である。傳襄謨、張健冬、簡泰梁は早くからの知り合いだった。傳襄謨は33年に來日した。この回想にしたがえば3人は一緒に來日したように見える。だが、日本側官憲の資料によれば、張健冬は33年12月、簡泰梁は33年の11月に來日したという（注13）。

來日した傳襄謨はその後「東京の新聞学院」に入った。

『留東新聞』創刊号の「中日新聞街」欄にはこんな記事が見える。

日本の新聞学院が去年の春に改組され、日本新聞協会の直轄となった。最初の卒業生で中国人は傳襄謨一人だけある。現在該院で学んでいる者は大公報の呉口民、大美晩報の呉漢其、先の新民報の張致中、救国日報の楊南克及び陶也先、劉渤海等である（注14）。

柳澤伸司『新聞教育の原点——幕末・明治から占領期日本のジャーナリズムと教育』によれば、この「東京の新聞学院」とは、1931年10月『国民新聞』の主幹だった山根真次郎が創設した「新聞学院」のことである。新聞学院の修業年限は一年で、「新聞通信社ノ従業員タラントスルモノ、若シクハ新聞ヲ研究セントスルモノニ必要ナル学理ト實際トヲ教授スルヲ目的」とし、「編輯学科」と「経営学科」の二科があった。新聞学院には、時の新聞各社が協力を惜しまず、「儲からぬ学校にしてはもったいないような斯界の一流の権威が講義を担当」していた。だが、「当初学生はわずか二、三十名」だけで、

やがて経営が悪化、34年2月に日本新聞協会がその経営を引き継いでいる（注15）。先の「記事」に、「日本の新聞学院が去年の春に改組され、日本新聞協会の直轄となった」とあるのはこのためである。傅襄謨は日本新聞協会の直轄となった新聞学院の最初の中国人卒業生だった。

以上のことをまとめてみると、『留東新聞』は、留学生内から資金を募るかたちで、傅襄謨、張健冬、簡泰梁、張致中、張先奇、蘇相華、向震たちによって創刊された。そこに簡伯邨、李仲平、呂奎文、常化知、楊烈、朱劍農等が加わったらしい。

『留東新聞』社は、その時、神田の中華基督教青年会館中の一室にあった。『留東新聞』創刊号には「東京神田神保町中華青年会内 留東新聞社」とある。

常化知は、その「部屋はとても小さく、何人かの人々がそこで働いていた。ある者は社内に寝泊まりしていた。「何らの報酬もなく」、「みんな手弁当だった」。対外的な連絡に尽力したのは張健冬で、資金確保に努めたのは簡泰梁、発行部数は3000だったと言う（注16）。

ここで、これまで見てきた『留東新聞』関係者の出身地についても一度注目していただきたい。彼らの大半が「四川省」の出身者である。繰り返しになるが、傅襄謨、張健冬、張安国は四川省江安、簡泰梁、簡伯邨は四川省富純、常化知は四川省興文、蘇相華は四川省内江の出身である

これが示すように、『留東新聞』は、留学生初の「新聞」を企図し、それを夢見た「四川省出身」の「新聞人」、留学生たちの手によって創刊された。創刊の経緯から見た『留東新聞』の最大の特徴がここにある。

(3) 「官」との関係

いま一つ、『留東新聞』の特徴として指摘して

おきたいことがある。それは、『留東新聞』と「官」との関係である。常化知は先の回想でこう書いている。

また多くの曲折を経て国民党大使館駐東京留学生監督処の同意を得、最終的にすべての合法的な手続きを処理し、日本東京警視庁主管部門の批准を取り付けた（注17）。

『留東新聞』が創刊に際し「官」に対しある報告をしていることは、『留東新聞』創刊号第一面、「創刊辞」のすぐ下にある記事「昇格後之／中国大使館／内部無変動」からも確認できる。そこには、『留東新聞』の記者が、創刊直前の35年6月5日午後2時に中国大使館に赴き、「蔣大使に本報の宗旨及び準備経過を報告し、会わせて大使館昇格後の新しい設備についても見てみたいと思ったが、たまたま大使は日本外務省に出向いて留守だったので、代わりに職員の水君会った」とある（注18）。

『留東新聞』は、またこの二日後6月7日に神田の中華基督教青年会で「創刊に向けた会合」を開いている。『留東新聞』創刊号（前出）第三面の「留東景象一新／四十代表歡聚一堂茶会席上」にはこうある。

本報は七日午後二時青年会会議室に留東各団体代表を招いた茶会を開き、各方面からの意見を聞いた。（留日学生）監督処、留東各省同郷会、各校同学会及び各学術団体、各新聞雑誌社などの代表四十余名が一堂に会し、じつに盛会であった。二時五十分開会、簡泰梁主席が開会の辞を述べ、向震が記録、張先奇が準備経過を報告、本報の態度を説明した。続いて各代表が演説、尤もなるご意見と多くの励ましを頂戴した。会場は厳粛な空気に包まれ、五時十分主席によって散会が宣せられた。

このように、『留東新聞』は「官」との間に、ある繋がりが認められる。

もつとも、時の留学生が基本的に留日学生監督処への「登記」を義務づけられていたことを考えれば、「官」と間にある繋がりがあることは当然と言えば当然なのかもしれない。たとえば、東京左連の『東流』、『詩歌』にしても留日学生監督処が開いた「茶話会」にその代表が出席している（注 19）。だがそれは招かれたから出席したのであって、自分たちの方から彼らを招いて会を持つなどということはおよそなかったであろう。

「官」とある繋がりがあったという点では、先の『留東学報』の場合も同じである。『留東学報』は創刊から半年たった 35 年 11 月 8 日、会食を交えた『留東学報』「作者座談会」を神田の中華基督教青年会で開いている。主席は『留東学報』の主編陳固廷、出席者は王桐齡以下 35 名、そこには着任したばかりの留日学生監督の陳次溥も招かれて発言している（注 20）。

また、昭和 11 年度『外事警察概況』「(二) 留学生発行に係る要注意新聞雑誌」の「留東学報」の項には、「東京市杉並区阿佐ヶ谷四丁目三四一 代表者 東大文学部研究生 陳保安」、「昭和十年七月一日陳保安、留学生監督周憲文、大使館員李能梗其の他東京帝大、明治、早稲田、法政大学等十八名の発起にて創刊せるものにして、其の目的は政治、経済の研究発表に在りと呼すれども、陳保安は蒋介石擁護団体たる中国藍衣社員にして、東京に於ける同志獲得、蒋介石反対者内偵の為に同誌発行に名を借り居るやの疑あり」と記されている（注 21）。

この「陳保安」とは陳固廷のことである。

そして、同じ昭和 11 年度『外事警察概況』の「留東新聞」の項には、次のように見える。

「昭和九年十二月二十九日中国国民党の東京直属支部に於て、執行委員会開催の際陳保安の提議に依り、同党機関紙として発刊することを協議し、昭和十年六月十二日創刊号を

発行」した（注 22）。

このように、『外事警察概況』は『留東新聞』の創刊に陳固廷が関係し、陳固廷の提議で『留東新聞』が「国民党東京直属支部」の「機関紙」として創刊されたと言う。だが、これはおよそ考えられない。それはこれまで見てきた『留東新聞』創刊の経緯、またこれから見るであろう『留東新聞』のその後の状況から見ても明かであろう。

では、『留東新聞』とはどんな新聞だったのであろうか。さっそく、『留東新聞』創刊号を見てみることにしたい。

(4) 『留東新聞』創刊号

『留東新聞』創刊号は「四六版八面」で、各面は四段からなる。

第一面には「創刊辞」、記事「昇格後之／中国大使館／内部無変動」、訪日視察団のことを記した「渡日考察熱／今年特別盛」、願携苦幹精神回中国／湖北教育考察団之感想」、その下には「要聞」三則がある。

第二面は、留学生の増大を伝える「留東同学激增／打破十年記録／已在監督処登記者三千四百余人」などが、その横には囲みで留日学生監督の周憲文の「留東新聞出版感言」がある。

第三面は、いわば第二面の「詳報」で、記事「各省留日公費生／総額二五四名」、「留東景象一新／四十代表歡聚一堂／在本報茶会席上」などが、その下に囲みで「青年文芸家／陳君治之死」、紙面左には囲みで、ぶち抜きの郭沫若「老生常談」が掲載されている。

第四面、第五面は、留日学生各界の動向を伝えるもので、第四面には、「早大中華政経学会／将発行訳稿会刊」、「『留東学報』／本月廿日創刊」が、第五面には、「陳文瀾精心結構／『日文応用文法』／則将出版」、「便利課余学習／独立絵画研究所」、「『詩歌』二期出版」、「『雑文』

二期将要目」などが伝えられている。

第六面は、「文化欄」であろう、ウィットフォアゲルの『中国の経済と社会』を紹介した「研究中国問題的／世界権威者「維特夫格爾」／最近即由日赴華考察任」、日中新聞界の消息を伝える「中日新聞街」九則、「中日文化街」六則などが掲載されている。

第七面は「読者・消息欄」とでも呼ぶべきもので、「本報特別啓事」、「最近帰国同学」、「読者信箱」、「『詩歌』二期要目」などが掲載されている。

最後の第八面は「副刊」である。そこには『留東副刊』第一期とあり、張致中の創刊の辞「我們的副刊」、彭毓炯女士「横浜博覧会印象記」、「東京案内」十則などが掲載されている。

このように、『留東新聞』創刊号は、時の中国人日本留学生の動きに関する事柄をじつに盛り沢山に、事細かく、幅広く伝えている。そうした中に、いまあえてその特徴のようなものを探れば、一つが『留東新聞』と東京左連との関係であろう。

東京左連の機関誌に関する第二面の広告『詩歌』二期出版」、「『雑文』二期将出版」などは他の盛り沢山な記事の中に埋もれ、それ自体が浮かび出ているわけではない。だが、「『詩歌』二期出版」には、「東京の雷石楡等青年詩人が中国詩壇の衰退を痛感し、特別に『詩歌』月刊を創刊した。第一期は読者の歓迎するところとなり、第二期は六月十日に出版され、その内容は以前よりも充実し、形式も斬新なものになっている」とある（注23）。また、「『雑文』二期将出版」にも、「『雑文』は一部の文学を愛好する留東青年が創刊したもので、内容は芸術全般にわたる。文学、美術、演劇、音楽の各部門を含め世界の芸術思潮の紹介を主とし、また日本及び欧州の作家の特約撰述もあり、第二期がまもなくされ、内容は第一期よりも豊富になってい

る由」と記されている（注24）。こうした紹介は、『詩歌』、『雑文』に詳しい人の手になるものである。

注目すべきは第三面の陳君治の死を報じた写真入りの囲み記事である。陳君治は、江蘇省江都の人で、上海で文芸誌『春光』月刊を出すなどしていたが、35年3月に来日、東京左連の機関誌『雑文』の同人となった。だが、彼は『雑文』が創刊される直前の5月11日、結核のため亡くなった。記事の最後には、翌12日茶毘に付されたことに続いて、「聞けば陳君等が創刊した『雑文』もまたこの日に誕生したという」と記されている（注25）。『留東新聞』と陳君治との間にどんな繋がりがあったのかはわからない。だが、こうした扱いはどこか他とは違う、『留東新聞』と東京左連との関係が見て取れよう。

東京左連との関係ということ言えば、郭沫若と『留東新聞』との関係もその一例である。28年2月日本に亡命してきた郭沫若が東京左連と関わりを持つようになったのは31年10月頃からで、その後、郭沫若は34年に結成された竹内好、武田泰淳などの中国文学研究会と繋がりが出来、35年の時点では千葉県市川の亡命先に留学生たちがよく訪ねてくるようになっていた（注26）。

『留東新聞』はすでに見たように、四川省出身の留学生の新聞人、新聞を愛する人々によって創刊された。同じ四川省の出身者の彼らがその時、先輩である郭沫若に対して抱いていた思いがどれだけのものであったかは想像に難くない。

『留東新聞』の人々は、その創刊を前にして千葉県市川の郭沫若を訪ねている。それは、創刊号に見える郭沫若の「老生常談」から明かである。郭沫若「老生常談」は『留東新聞』の求めに応じて書かれたものである。「老生常談」

は、「数日前何人かの元気のいい四川の同郷が郊外の私のところに来て、最近の留日学界の隆盛を談じ、人数は五千近くにまでなりながら向学の空気は逆に沈滞している。新聞を出して求学の空気を鼓舞したいので、私にも何か書けと言う。彼らの主旨に私も賛成である」と書き出される（注27）。

この「老生常談」は「一九三五年六月六日」に書かれている。『留東新聞』の人々は、この前日の35年6月5日には、『留東新聞』創刊の主旨を大使館に報告している。『留東新聞』の人々が郭沫若の寓居を訪ねた時は特定できない。だがそれは、「流れ」から見て、『留東新聞』創刊の話が固まった後と考えるのが自然であろう。ましてや、事前に郭沫若との相談の中で、『留東新聞』を「週刊」としたなどとの話はおよそ考えられない。

ただ、『留東新聞』の創刊に際し、郭沫若の支持があったことは確かである。だが、『留東新聞』創刊に関するすべてが郭沫若の支持、相談のもとでなされたというのは、郭沫若の存在を「事大化」した常知化たちの「勇み足」であろう。

最後に、『留東新聞』の特徴として「副刊」を挙げておきたい。第八面全部を使った「副刊」は、後述するようにその名称を何度か変えながら最後まで続いている。『留東新聞』がなぜそれほどまでに「副刊」に拘ったのか、その理由はよく分らない。だが、それは間違いなく『留東新聞』の一つの特徴である。

（5）「時事」を語り出した『留東新聞』

『留東新聞』は当初、「新聞紙法」に定める保証金が納められないために時事問題を語る事が出来なかった。『留東新聞』には「なぜ時事に関する記事を取り上げないのか」という読者からの声が早くからあった。それ対し、35年4月1日発行の『留東新聞』第3期は第一面最上段

の「破笛」欄（のちの「社説」欄——小谷）「敬告読者諸君」で次のように答えている。

政治を語らないのはやむを得ないとしても、しかし時事に口を閉ざしているもまた本報の望むところではない。我々は二千元の保証金を納めていないので、日本の出版法の規制を受けざるを得ない。このため、精魂を傾け、心血を注ぎ、両の足を棒にして手にしたニュース、その多くが読者が読みたくても中国の新聞では目にすることが出来ないものも、それを読者にお見せする術がなく、やむなく一件また一件と紙くず籠へ棄てるしかない。新聞の特性は時間性と空間性にある。しかし、本報第一期第二期はまだそこまで達していない（注28）。

その当時、「時事」に関する記事を掲載するためには所定の保証金を管轄の監督官庁に納めなければならなかった。新聞紙法第12条には次のように記されている。

第十二条時事ニ関スル事項ヲ掲載スル新聞紙ハ管轄地方官庁ニ保証トシテ左ノ金額ヲ納ムルニ非サレハ之ヲ発行スルコトヲ得ス

一 東京市、大阪市及其ノ市外三里以内ノ地に於テハ二千元

二 人口七万以上ノ市又ハ区外一里以内ノ地に於テハ千円

三 其ノ他ノ地方ニ於テハ五百円

前項ノ金額ハ一箇月三回以下発行スルモノニ在リテハ其ノ半額トス

この規則は、新聞だけではなく、元手の薄い不定期刊の雑誌にも課せられ、時の新聞、雑誌の不穏な政治的発言を規制する役割を果たしたと言われる（注29）。『留東新聞』はこの保証金「二千元」を納められなかった。このため、彼らは「時事」を語る事が出来なかったのである。

また、その当時の『留東新聞』には、単なる

留学生の「情報誌」で、美人が留学していたとか、男女の色恋沙汰がどうこうしたとかばかりで詰まらないという声もあった（注 30）。こうした状況下で『留東新聞』の側も第 1 期、2 期では「時間性」、「空間性」という新聞の「特性」が活かされていないと苦悩していた。「時事」を語りたいとの思いは、『留東新聞』の人々の思いでもあったはずである。

こうした中、35 年 12 月 13 日発行の『留東新聞』第 12 期の第一面最上段「本報徵求訂戸啓事」には「今月十日から三十一日まで」「長期の定期購読」を求めるといふ呼び掛けと共に「定期購読募集」にはこう見える。

（我々は——小谷）保証金二千元について懸命に準備し、ついに完納し、その刊行を勝ち取った。今後の本報の内容は、すべての規制を受けないので、必ずや日々に十全となり、その記事は新生面を切り開くであろう（注 31）。

このように、彼らは 12 期までには保証金二千元を納め、「時事」について語れるようになっていた。常化知はそれを第 7 期からで、第 7 期以降『留東新聞』には「反日抗日」、「日本ファシストの侵略に対する言論と資料」が掲載されるようになり、「たえず官憲の警告」を受けるようになったと言ふ（注 32）。だが、これは常化知の記憶違いである。『留東新聞』が保証金を納め、「時事」について掲載可能になったのは第 11 期からである。36 年 12 月 6 日発行の『留東新聞』第 11 期第一面「本報特別啓事」にはこうある。

（一）本報は第 10 期出版後、日本出版法の規制で（保証金を完納していない新聞はたとえ翻訳といえども、時事及び政治などのニュースを掲載できない）ため、本報継続の見地から、積極的に保証金完納の手続きを準備せざるを得ず、その過程、困難は並大抵ではな

かった。このため（『留東新聞』の発行が——小谷）今日まで遅れてしまった。このことを、第 11 期の継続発行に当たり、読者にまずもってお詫びしなければならない。今後の掲載範囲は、より広範になり、投稿も政治経済社会歴史哲学文芸・・・等、均しく歓迎するものである（注 33）。

そして、この『留東新聞』第 11 期第一面には「何応欽等入平後／華北局勢急転直下」と題する「時事」記事が掲載されている。これ以降、『留東新聞』には第一面を見ただけでも、第 12 期（12 月 13 日）に「華北問題暫趨妥協／中央在避自治名称之下／正式発表冀察政務委員会」、第 13 期（12 月 20 日）に「学生運動如火燎原／正陽門前新戦地 八千男女血淚横！／北平学生二度示威」、第 14 期に（12 月 27 日）本報社評「歴史上悲惨之屠殺／敬悼北平被難同学」、「学生運動先鋭化／上海形勢異常緊張」などの「時事」に関する記事、社論が掲載されて行く。

同じ時、『留東新聞』は「編集兼発行人」がそれまでの傅襄謨一人から、「張健冬 傅襄謨 簡泰梁」の三人体制となる。常化知は、その理由は傅襄謨が病気になったからだと言ふ。常化知はために、張健冬が実質的「発行人」となり、簡泰梁が「編集」を受け持ったと言ふ（注 34）。だが、そればかりではないだろう。そこには『留東新聞』発行の基盤を強固にするという狙いもあったはずである。そしてそれは『留東新聞』が保証金を収め、「時事」を語れるようになった経緯と無関係ではないだろう。『留東新聞』が保証金を納め得た背景にはそれを支えた多くの中国人日本留学生がいたはずである。『留東新聞』の「編集兼発行人」が傅襄謨、張健冬、簡泰梁の三人体制になったことはおそらくそうしたことの現れでもあったろう。

傅襄謨は 36 年 6 月『国民新聞』の編集者とし

て招かれ帰国する（注35）。だが、『留東新聞』はそれ以降も張健冬、簡泰梁の二人によって支えられて行く。

（二）『現世界』半月刊，引擎出版社

（1）『現世界』半月刊

最初に見たように、「『留東新聞』事件」とは単に『留東新聞』が「先鋭化」したことだけではなく、そこには彼らが『現世界』半月刊を日本国内に持ち込み、販売していたという『現世界』半月刊事件」が深く関与している。そして私には先に記したように、事件の因としてはむしろこちらの方が大きかったように思われてならない（注36）。

『現世界』半月刊は36年8月16日に創刊された。「編集人」は錢俊瑞、「発行人」は胡一声、「発行所」は現世界社、販売する「經售処」は上海生活書店、上海雜誌公司、引擎出版社、讀書生活出版社、光明書局の五社である。この『現世界』半月刊は37年3月16日発行の第2巻第3期で国民党によって停刊に追い込まれるまで、総15期が刊行された。

『現世界』半月刊創刊の目的は「創刊辞」に次のように見える。

「世界はかくも実在する世界である」。こうした時、「我々は第一に切実に現世界の一切をはっきりと認識しなければならない。たとえば、眼前の世界は一人の侵略者が大屠殺を行わんとしているその前夜であり、また眼前の中国は私たちの「友邦」によって完全に滅亡されんとしているその前夜である。いまあなたは最も真摯な態度、最も鋭い眼差しで、一切の侵略主義者の陰謀術数とあからさまな攻撃、闊討ちを見抜き、我が隣邦の侵略主義者がいかに我々中国の「文明」を強奪し、「平和」を奪い去っているのかを見抜かなければならない。と同時に、我々は熱烈な思いで、

全世界の人民大衆が平和を奪取するため、暗黒勢力を排除するため、その侵略行為を打破するために行われているすべての英雄的な活動、隊伍を理解しかつ深く連携し、中華民族自身の斗争をさらに押し進めて行かなければならない」、「我々は我々の英明な理知に基づき目前の現実を認識すると共に、その認識を基に目前の世界を改造して行かなければならない」（注37）。

ここで見える「一人の侵略者」、「隣邦」の侵略主義者」などについては贅言を要しないであろう。このように、『現世界』半月刊はファシズムが荒れ狂う「現実」、「現世界」の姿と、それに「対抗」する全世界人民大衆の動き、「現世界」を客観的、かつ冷静に読者に伝えることを目的としていた。こうした『現世界』半月刊創刊号の「目次」は次の通りである。

創刊辞

我所望於全国同胞書 馬相伯

和平的呼籲 錢俊瑞

中国応取的外交政策 章乃器

目前中国文化界的動向 艾思奇

[戰神與和平之神的搏鬥]

欧州兩大陣線の檢閲 錢亦石

動盪中的西班牙 姜解生

暴風雨前夜の希臘 柳乃夫

中国與日本 熊

[緝私之聲]

緝私與民衆 諸青來

商人应当緝私 諸文綺

過去緝私工作的總檢討 駱耕漢

時事連環漫画——鞋子變成炮彈的故事 彼得

[知己知彼]

日本の社会結構 李凡夫

中国的社会結構 何幹之

顯微鏡——做了傀儡以後怎麼樣 朱楚辛

[国防常識]

大衆與防空	煒輝
国内通信——回想北平	李凌
[青年生活]	
中国青年往何处去	劉羣
青年問題討論（見面的幾句話）	耶夫
蘇聯的新青年	金則人
半月来的中国經濟生活	王文元
小知識——色彩的世界	胡一声
[文芸]	
郭沫若詩作談	郭沫若 蒲風
關於迷途的羔羊	王達夫

これを見ただけでお分かりいただけるだろう。ここにはじつに様々な「現世界」、「現実」が描かれている。そして、ここには章乃器などの民主人士、艾思奇などの左翼文化人、錢亦石などの出版人、詩人の蒲風や日本亡命中の郭沫若などじつに多様な人々が寄稿している。その寄稿者は田漢など 60 名以上にも及ぶと言われる（注 38）。だが、こうした編集は意図的なものだった。彼らは編集に細心の注意を払い、「内容面で階級闘争と国共内戦等の問題に言及するのは極力避け、意識的に国民党の上層、たとえば馮玉祥、孫科、梁寒操等の題辞、原稿を戴せたり」し、『現世界』半月刊に「より広範な力を団結」、結集しようとしていた。その理由は、かつて上海生活書店から出されていた『大衆生活』、『永生周刊』のように『現世界』半月刊を夭折させたくなかったからである。発行人である胡一声は、『現世界』半月刊創刊の意図を「民主団結、抗戦救国」にあったと言い切る（注 39）。

『現世界』半月刊創刊号には出版社名が記されていない。だが、その出版元は発行人である胡一声が社長を務めていた引擎出版社である。『現世界』半月刊創刊号の「経售処」には生活書店以下 5 社の名が記されている。だが、37 年 1 月 16 日発行の第 1 卷第 11 期からは引擎出版社だけが「総経售」となっている。そればかり

ではない。引擎出版社の所在地は後述するように現世界社と同じである。

では、こうした引擎出版社とはいかなる出版社で、どのような経緯で設立されたのであろうか。

（2）引擎出版社

『現世界』半月刊の出版元である引擎出版社の設立、『現世界』半月刊創刊の経緯については胡一声・丁裕の回想「關於『現世界』雜誌和引擎出版社」に詳しい。そこには次のように記されている。

1936 年は、国民党反動派の“攘外安内”という反動政策が横行していた時で、上海で出版されていた抗日救国を主張する『大衆生活』（主編は鄒韜奮）及び『永生周刊』（主編は金仲華、後に錢俊瑞）が相継いで停刊を命じられた。鄒韜奮、金仲華は前後して香港に行き『生活日報』と『生活日報星期日』の出版工作を主宰した。その時、生活書店は上海で『永生周刊』のような雑誌を再度出版することはもはや困難であった。だが、広範な読者は進歩的な精神的糧を切に求めていた（注 40）。

このように、『現世界』半月刊の創刊、引擎出版社の設立は時の上海での出版状況、生活書店をめぐる出版状況が深く関係している。『大衆生活』は 1935 年 11 月 16 日上海生活書店から創刊された。『大衆生活』の「主編兼発行人」は鄒韜奮である。『大衆生活』は、同じように先に生活書店から出されていた『生活』週刊、『新生』などの精神を受け継ぎ、「民族解放の実現、封建残余の除去、個人主義の克服」を「三大目標」としていた。だが、『大衆生活』は、国民党の手によって 36 年 2 月発行の第 1 卷第 16 期で停刊を余儀なくされる。それに続く『永生周刊』は 36 年 3 月 7 日に創刊された。『永生周刊』は『大衆生活』の精神を受け継ぎ、「個人の永生」、「民

族の永生」を目指していたが、36年6月27日、17期で発禁に追い込まれる（注41）。先の胡一声・丁裕の回想には続けてこうある。

こうした状況下で、かつて『永生周刊』の編集をしていた柳乃夫（趙孚）がわざわざ日本の東京に来て、鄭天保と胡一声を訪ね、彼らに日本及び南洋などの地にいる華僑から資金を集め、上海で継続して抗日救国を主張する刊行物を出版したいとの思いを話した。鄭、胡の二人は抗日救国の大業の必要性から喜んで承諾し、まず日本留学生から資金を募集し、その後さらに南洋華僑及び上海の友好的人士からも資金を募集した（注42）。

このように、引擎出版社は中国人日本人留学生をはじめとする南洋華僑、在上海などの人々の「基金」によって設立される。

中国人日本留学生と出版社ということ言えば「不二書店」、「聯合出版社」などが思い当たる（注43）。その中でも、侯楓がはじめた聯合出版社は『今代文芸』、『東方文芸』などを創刊し、そこには多くの日本留学生、東京左連の関係者、郭沫若などが寄稿した注目すべき出版社、雑誌である。だが、それとても日本留学生という枠を越えるものではない。そうした中において引擎出版社は、日本留学生だけでなく、南洋華僑、国内の愛国人士の手によって設立された中国近代出版史上初めての出版社である。引擎出版社の設立、『現世界』半月刊創刊の意義がここにある。次には、こうした引擎出版社の設立、『現世界』半月刊創刊の経緯をいまま少し具体的に見て行くことにしたい。

（3）引擎出版社の設立

鄭天保、胡一声と連絡を取るために来日した柳乃夫のことは「柳乃夫生平年表」（『榮昌文史資料選輯』第7輯 2005年）などに詳しい。それによると柳乃夫は、1910年の生まれで、四川

省榮昌県の人、本名を鄭宗麟という。「柳之夫」は筆名で、彼の好きな「New Life」に因んで付けた名である。柳乃夫は34年に中国共産党に入党、35年春一度来日したが、36年初めに帰国。帰国後は、『永生周刊』、中国左翼社会科学者連盟などで活動していた（注44）。

鄭天保は広東省梅県の出身で、本名を鄭君度という。広東省立梅州中学から26年広州中山大学に進んだ。「鄭天保」というのは彼の数多い「筆名」、「偽名」の一つである。鄭天保は胡一声と同郷で、梅州中学、中山大学の「同学」で、26年胡一声の紹介で共青团に加入、翌年共産党員に転じた。この二人は広東嶺南中学の創設者としても知られている（注45）。鄭天保は南昌起義後、「広東工農革命東路第10団」の団長などを務めるなどしていたが、やがてシンガポール、上海、西安などで革命運動に従事した。33年に逮捕され、34年に保釈になった後、「南洋」に帰って来るようにと家が用意してくれた旅費を手に来日した。彼の家は南洋で、ゴム、錫を生産する裕福な家だった（注46）。

鄭天保と胡一声との関わりは深い。それを示す、鄭天保の「筆名」をめぐるこんな話がある。鄭天保は33年に国民党に逮捕された。その時、彼は「胡英」と名乗っていた。胡一声たちが動いたのであろう。彼は、「華僑胡一声の兄」、「胡天声」ということで保釈になった。彼は保釈になった後も「胡天声」を名乗り続けていた。引擎出版社に入っても「胡天声」の名で経理を務めていたという（注47）。

こうした鄭天保が34年の来日後、間もなくして胡一声と行動を共にしたであろうことは想像に難くない。

胡一声のことは楊凡の回想「沈痛悼念老戦友胡一声同志」などに詳しい。胡一声は本名を胡水廷といい、「胡一声」は筆名である。胡一声は、1905年の生まれで、広東省梅県の人。26年6月

中山大学時代に共青团に加入し、同年8月党员となり、鄭天保と共に「広東工農革命東路第10団」で活動し、28年鄭天保と同じように「南洋」に行き、シンガポール、インドネシアのジャワで、「華僑教育」に従事している。彼はジャワで同郷の詩人蒲風と知り合い、蒲風たちとガリ版刷りの『狂風』という雑誌を出している(注48)。胡一声は34年の夏頃に蒲風と共に来日した(注49)。

先の回想の作者楊凡は、26年、胡一声が広州中山大学にいた時からの知り合いで、楊凡の家は胡一声たち共青团の連絡場所だったという。その楊凡は、胡一声より一足早く、33年春に来日している。来日後の楊凡は、友人たちの援助を受けながら早稲田大学に学んでいた。

そこに胡一声たちが来日してくる。

楊凡は、胡一声の求めに応じ、東中野の二階屋と一緒に住むことになる。その二階には胡一声と蒲風が住み、横の小部屋に楊凡が、一階には楊凡の妻呉素霞が住んだ。楊凡は、蒲風がここでのちに詩集『六月流火』としてまとめられる諸作品を書き、胡一声はここから明治大学の新聞学科に通ったという(注50)。

すでに中国詩歌会のメンバーだった蒲風は、来日するとすぐに東京左連の活動に加わる(注51)。蒲風は雷石楡を通して小熊秀雄等『詩精神』の人々と知り合い、35年2月には雷石楡の詩集『砂漠の歌』の出版記念会に出席した(注52)。彼はまた来日した聶耳を自らが主宰する「詩歌座談会」に講演してもらったりなどしている(注53)。この蒲風は36年6月に帰国した(注54)。

胡一声の日本留学時代についてはよく分からない。楊凡は胡一声が明治大学新聞学科に通っていたと言うが、日華学会学報部が出した当該年度の『留日学生名簿』にも胡一声のことは出てこない。胡一声の日本留学時代で分かっているのは次の二つだけである。

胡一声は日本留学時代に後述する饒一峯等と共に「中華留日教育座談会」、「教育座談会」に参加している(注55)。

「教育座談会」は時の中国人留学生たちが組織したサークルの一つだが、その活動の実態はまだよく分かっていない。機関誌『国際教育』も所在が分からずいまなお「幻の雑誌」になっている。

この『国際教育』については昭和12年度『外事警察概況』「(三)本国其の多より留学生宛郵送に係る反日又は共産主義宣伝物」「(二)国際教育」に次のように記されている。

(二) 国際教育(雑誌)

東京市本郷区森川町八八

東大大学院生 廖鸞楊

右者中心となり在京留学生十数名を以て、客年十二月「中華留日学生教育座談会」を結成し、時々座談会を催しつつありたるが、三月一日機関紙として上海に於て印刷中なりし「国際教育」第一巻第一期一千五百部中の五百部郵送越あり、同誌に「日本学校教育の批判」と題し、日本の教育は人類一般並国際道徳を省みざる国民道徳重視主義をとるのみならず、自国を本位都市とし世界を全く念頭に置かざる国民の養成を目的とする国家主義的立場にあるものなり云々の反日記事あり(注56)。

中華留日教育座談会は、ここに見えるように35年12月、廖鸞楊等「在京留学生十数名」によって結成された。胡一声はこの教育座談会の幹事をしていた。

『国際教育』の代表者である廖鸞楊は、胡一声等と同じく広東省梅県の人で、広州中山大学を出た後日本に留学し、35年に東京帝大文学部の大学院に入学している(注57)。

『国際教育』は36年3月頃に創刊されたらしい。36年7月15日には第1巻第3期が発行さ

れ、「ソ連の青年教育」などの記事があるという（注 58）。

胡一声はこの「教育座談会」の結成時からメンバーだったと思われる。

胡一声はまた 36 年の 4 月に蒲風と日本亡命中の郭沫若を訪ね、郭沫若の詩に対する考えを聞きまとめている。これが『現世界』半月刊創刊号所載の郭沫若・蒲風「郭沫若詩作談」である。該文は 1982 年 11 月発行の『新文学史料』82 年第 4 期に胡一声「郭沫若与蒲風談作詩」と題して全文が再録されている。その文末には「1936 年 4 月 4 日記・郭老親自校閱過」とある（注 59）。

話を引擎出版社設立の経緯の方に戻したい。

柳乃夫の話に共鳴した鄭天保、胡一声はまず日本人留学生から「基金」を募ることにし、まもなく鄭天保、胡一声は帰国し、南洋での資金集めに入った。彼らは南洋を活動の拠点としていたことはすでに述べた通りである。柳乃夫はこの時、張天保と南洋に行き、二ヶ月余りの間にシンガポール通貨で 6,7000 元の資金を得たという（注 60）。

引擎出版社はこれらの資金をもとに設立された。胡一声・丁裕こう書いている。

胡一声は上海に戻ると銭俊瑞と相談し、華僑名義で「引擎出版社」を起し、『現世界』半月刊を出版し、銭俊瑞が主編となることを決めた。胡一声は帰国華僑の名義（胡は元シンガポール華僑中学の校長）で、国民党偽上海市政府に登録し、『現世界』半月刊の発行人となった（注 61）。

『現世界』半月刊の主編となる銭俊瑞は、1908 年の生まれで江蘇省無錫の人。29 年から農村経済の研究に従事し、中国農村経済研究会を組織して『中国農村』に数多くの文章を発表、経済学者として著名である。34 年に左翼文化総同盟に入り、35 年共産党に入党、上海文化界救国会党団書記となり、36 年には先の『永生周刊』の

主編を務めるなどしていた。（注 62）。

やがてそこに生活書店の丁裕が加わる。丁裕はそれまで香港の生活日報社にいた（注 63）。上海に戻ってきた丁裕に、生活書店の王益は、銭俊瑞が出版物を出そうとしているので援助するようにと言う。まもなくして、銭俊瑞の意を受けた柳乃夫が丁裕を訪ねて来て、丁裕は柳乃夫を介して胡一声を知り、引擎出版社、『現世界』半月刊に加わるようになった（注 64）。やがて彼らは、上海愛多亜路（エドワード路）中匯銀行のビルの一角に 20 平米にも満たない部屋を借りて仕事をはじめた。引擎出版社の誕生である。この引擎出版社があった「上海愛多亜路中匯銀行のビル」とは「愛多亜路中匯大樓」のことで「現世界社」の所在地でもある。

社長は胡一声、編輯は柳乃夫、李凡夫、胡耐秋、会計は胡逸凡、発行業務は丁裕と邵士英が受け持った（注 65）。

ここに名前が見える李凡夫は 1906 年の生まれで広東省中山県の人、本名を鄭錫祥という。広東省中山大学附属中学を経て 29 年日本に留学、満洲事変勃発に抗議して帰国。帰国後は 33 年に社会科学家連盟、社連に参加し、34 年共産党に入党、社連の常任委員会委員、党団書記などを務めていた（注 66）。また、胡耐秋は 1907 年の生まれ、江蘇省丹陽の人、女性である。胡耐秋は生活書店に関係し、胡愈之、鄒韜奮とも繋がりがあり、36 年上海に出て上海市各界婦女救国連合会所属の「女性教師会五人小組」のメンバーとして活躍していた（注 67）。このように、引擎出版社、『現世界』半月刊には救国会、社連の人々が数多く関係している。

『現世界』半月刊はこうして人々によって 36 年 8 月 16 日現世界社、引擎出版社から創刊された。

（三）「『留東新聞』事件」、 「『現世界』半月刊

事件」

『現世界』半月刊が創刊される3ヶ月ほど前、36年5月10日『留東新聞』社は手狭になったために社屋を「神田区一ツ橋二丁目三番地」に移した。36年5月15日発行の『留東新聞』第33期の「本報特別啓事」によれば、彼らは5月22日「留東新聞閲覧室」内に「報刊閲覧室」を設け、そこに、「上海『申報』、北平『晨報』、『東方雑誌』などを定期的に取り寄せ」、パリの『救国時報』なども閲覧できるようにし、同時に日本の「唯物論研究会、労働新聞社、消費組合等」とも連携するようになっていた（注68）。

同じ頃『留東新聞』は、第15期（36年1月17日）以来、「発禁」、「削除処分」を繰り返すようになっていた。たとえば、5月8日発行の第32期は、五・一五事件後に召集された第62回国会を取り上げた廉で、同月29日発行の第35期は「華北に密輸盛んに行はる、日本は責を辞する能わず英米均しく同感」という記事がもとで、8月7日発行の第43期は二・二六事件に触れたために、11月20日の『留東新聞』の最終号の59期（11月20日）も「綏東戦争勃発／全国愛国運動激化」という記事がもとで発禁、発行停止処分になった（注69）。

同じ時「副刊」もまた微妙に変化している。

『留東新聞』は経済的な事情からであろう、当初「四六判八面四段組み」だった誌面をまもなくして「四六判四面九段組み」とする（注70）。だが、こうした中でも副刊は守られ、「四面九段組み」になっても、第四面全部が「副刊」に当てられている。私は先に『留東新聞』の特徴の一つとして副刊を挙げた。彼らがなぜこれほどまでに副刊に拘ったのかは分からない。だがこの「副刊」は最後まで堅持された。

副刊の名は第3期までが『留東副刊』、創刊時の『留東副刊』の中心になったのは張致中等である。それはやがて『一葉文芸』と名を変え、

文芸的色彩を鮮明にする。35年13日に発行された『留東新聞』第12期・「一葉文芸」第12期には、林林訳・海涅作「人生的航路」、陳辛人「「關於去呵！去呵！」和「救命呀！救命！——看了決堤之後」、魏孟克「視察專員的登場」、質文（雑文）第四期要目などが掲載され、そこには東京左連のメンバーが多数寄稿している。この『一葉文芸』は第20期（36年2月14日）を過ぎたあたりから微妙に変化し始め、第21期（36年2月21日）は『一葉文芸』と銘打たれているものの紙面は「中華留日婦女座談会」、「留東婦女会」に開放されている。以後「副刊」は多くの留学生に開放され、第28期（36年4月10日）は『婦女生活』第2期、第29期は「中華留日新文字座談会主編」『新文字特刊』第1期となったりするが『一葉文芸』という名も捨ててはいない。この副刊『一葉文芸』は『留東新聞』第35期（36年5月29日）から『文化戦』第1期となる。この『文化線』は一ヶ月に一度ずつ新文字学会の『新語言』、留東婦女会の『留東婦女』などに紙面を譲りながら停刊まで続いている。

『文化戦』第1期の「我們的工作——代発刊詞」は、「矛盾と危機が充満している現社会の中で、ほとんどすべての文化界が、暗黒の黒雲に覆われ、大多数の青年は衰頹したあるいは庸俗極まり文化の中で呼吸している。とりわけ中国は社会的動乱と紛糾が特別に酷く、一切の前進的文化運動はすべて残酷な抑圧を受け、粗末な、死んだような、人々を気休めと墓場に向かわせるそうした文化だけが「合法的」な生存を許されている。これがために、青年たちはみな真正の文化の窮乏を感じている。」と書き出され、「『文化線』は決して少数の所有物ではない。それは青年大衆の文化的砦である。我々は読者諸君の指導と援助のもとで速やかに成長し、「線」の曙光を燃えさかる巨火に成長させたい」

と締め括られている（注71）。

こうした『文化線』が単なる文芸副刊の枠を越えていることは明らかであろう。『文化線』はこの時留学生の文化的運動体として様変わりしている。

『留東新聞』の報道が「先鋭化」していったのは、日中関係が緊張していく中でごく自然な流れだったであろう。昭和11年度『外事警察概況』、「第四 留学生に対する取締状況」「（二）留学生の発行に係る要注意新聞雑誌」「留東新聞」の項にはこうある。

本年中（36年——小谷）に於ては一月十七日附にて第十五期を發行してより、十二月十八日附第五十八期までに四十四回の發行をなせり。従来其の記事の大部分を本邦新聞雑誌より翻訳轉載し居りたるも、本年初頭より本国よりの通信をも掲載すべく、本国各地在住の関係者に特約通信員たることを委嘱すると共に、一面本国内に於ける販売網を漸次拡張する為め本国各地書店に向け発送し、其の販売を依託することとなれり（注72）。

このように、『留東新聞』は度重なる「発禁処分」を受けながら、その活動の範囲を逆に広げていた。時の中国人日本留学生の増大を背景とした彼らの運動のある「成熟」と言ってもいいかも知れない。

彼らの背後には多くの中国人日本留学生がいる。彼らの声を聞き、求めに応じようとするればその記事が「先鋭化」していくのは理の当然のことである。

こうした時、彼ら中国人日本留学生、南洋華僑の手になる引擎出版社設立の動きが起き、やがて彼らの手によって「民主団結、抗戦救国」を唱える『現世界』半月刊が創刊された。

彼らは引擎出版社を『現世界』半月刊を自分たちの出版社、雑誌と捉えたに違いない。それは何も『留東新聞』の張健冬、簡泰梁、王瑞符

だけではなかったろう。そこには同じような多くの中国人日本留学生がいたはずである。『現世界』半月刊の委託販売を行っていたという王瑞符は江蘇省塩城の出身、南京曉莊師範を出た後、35年頃に日本に留学し、「東亜学校」を経て、中央大学で学んでいる（注73）。王瑞符が『現世界』半月刊を日本国内で委託販売し始めたのは「客年10月頃」、『現世界』半月刊が創刊されてからまだまもない時である。日本側官憲側からすれば、こうした雑誌が日本国内に持ち込まれ、公然と委託販売され閲覧されること自体許し難い事態だったに違いない。

胡一声・丁裕はこう書いている。

『現世界』半月刊の創刊号は東京へ送ると、留日同胞の暖かい歓迎を受けた。「だが、第2、3期到着後は、日本当局にマークされ、刊行物の代理発送していた同学の何人が当局の刑事によって逮捕、拷問を受け、彼らを国外追放にし、再び日本に留学することは許されなかった（注74）。

事件は36年1月14日に起きた。常化知は、その時のことをこう記している。

たぶんその年の春節の時だったろう、警察が『留東新聞』を捜索した。私たち全員、張健冬、簡泰梁、李仲平、簡伯邨と私の五人を逮捕した。彼らは何の理由も言わず、二階で本箱や書棚をひっくり返し、いくつかの原稿を持っていった。だが、「違法」な物証は何も探し出せなかった。家宅捜査が終わると、彼らは、私たちを連行、留置し、取り調べた。

常化知は、『留東新聞』が「非合法」の活動をしているのではないかという官憲側の取り調べに対し、『留東新聞』は日本側の許可を得て発行されているもので、違法行為でも何でもない頑強に抵抗し、やがて釈放された。だが、残る人々は一ヶ月以上も勾留された後、強制送還になった（注75）。

また、簡伯邨はこう記している。

『留新』の事業が日に日に盛んになり、一九三七年の春節を楽しく過ごした数日後、神田警察署の特高が突然襲ってきて、『留新』の七人張健冬、簡泰梁、李仲平、宕全文、私と二名の雇員を逮捕、取り調べた。半月ほどの厳しい拷問を受け、『留新』は閉刊となり、張健冬、簡泰梁共に早稲田大学の卒業生と二名の雇員は逐次追放となり、私と李仲平、宕全文は在籍者だったので引き続き留学が許され、私が『留新』の後を処理した（注76）。

官憲側の資料によればこの時逮捕されたのは「8名」で、張健冬、簡泰梁、王瑞符等は逮捕から10日ほど経った37年1月25日、横浜から阿蘇丸で上海に諭旨送還になった（注77）。

このため『留東新聞』は37年1月8日発行の第59期をもって停刊を余儀なくされる。

だが、その時『現世界』半月刊を日本国内に取り寄せ、販売していたのは、何も『留東新聞』の人々らだけではなかった。胡一声・丁裕の回想にはこう記されている。

日本の大新聞『東京新聞』は饒××が国外追放になった記事でこう書いている。「饒××は早稲田大学の学生で、中共党人胡一声の党徒である。胡一声は明治大学の卒業生で、かつて彼が主編した『国際教育』月刊で平生文相（当時日本の内閣の教育大臣）の教育政策を攻撃し、帰国後は彼の機関報『現世界』で日本帝国・・・に反対した」云々と（注78）。

ここに見える「饒××」とは、「饒一峯」のことである。饒一峯は37年2月に『現世界』の委託販売をした廉で逮捕、強制送還になった。饒一峯のことは昭和12年度『外事警察概況』「左傾反日宣伝出版物取次販売従事留学生の諭旨送還」「饒一峯」の項に次のように見える。

東京市淀橋区下落合

早稲田大学商学部 饒一峯 当二十八年

右者昭和九年三月金融学研究の為と称し本邦に渡来入京し、目下早稲田大学商学部二年なるが、夙に左傾反日思想を抱持し、本年五月中国留学生の左翼団体「中華留日教育座談会」に加入し、秘密会合を為すと共に同会機関誌「国際教育」に左傾反日語の寄稿を為し、之が宣伝に努め居りたるが、同八月「中華留日教育座談会」幹事、胡一声が帰国し上海に於て反日宣伝を目的とする「現世界社」を結成するや、率先して之に加盟し、九月二日以来同社発行の強烈なる左傾反日雑誌「現世界」等を数回に亘り取り寄せ、九百三十五部を東京成光堂、同笹川書店に委託販売し中国留学生間に左傾反日思想の宣伝に努め居り、其の間発禁差押処分に附せらるること四回に及びたるが、本名の如き反日分子を在留せしむるに於ては、多数在留中国人の思想行動を悪化せしむる処あり、在留好ましからざるに依り、取調の上本二月十四日横浜出帆の筑紫丸にて上海に向け諭旨送還せり（注79）。

この饒一峯については、日華学会学報部編『昭和十年六月現在 留日学生名簿』、「早稲田大学」の項に、「饒一峯 二七 広東 梅 商学部一学年 広東国民大学政経科卒」とある。このように、饒一峯は胡一声と同じ広東省梅県の出身で、胡一声が幹事をしてきた「教育座談会」のメンバーだった。饒一峯はこうしたことから現世界社、引擎出版社を支援したのであろう。

同じような人に「熊琦」がいる。熊琦については、昭和12年度『外事警察概況』「第三、留学生に対する取締状況」、「（二）中国留学生諭旨送還事例」、「二、左傾抗日思想の宣伝」「熊琦」の項に次のように見える。

○国籍 広東省梅県

○住所 豊島区長崎南町

早大 大学院経済科生 熊琦

右者昭和十年二月勉学の為と称し、渡来同

年五月より肩書校に入学せるが、夙に左傾反日思想抱持者にして学業を怠り、昭和十一年八月頃上海に於て同郷人元留学生胡一声が中心となり、抗日宣伝を目的とする雑誌「現世界社」を結成するや直に同人となり、其後抗日的記事を寄稿し居り、又同年九月以降雑誌「現世界」を五回に亘り四二〇余部を取寄せ同郷人と共に神田区神保町成光堂に委託販売し、或は直接中国留学生等に頒布し抗日宣伝に努め居る事実を探知せるを以て、一月二十七日検挙し取調の上二月一日諭旨退邦せしめたり（注80）。

このように、熊琦もまた「現世界社」の関係者で、『現世界』半月刊を取り寄せ、「神田区神保町成光堂に委託販売し、或は直接中国留学生等に頒布」していた。そして彼の周りには彼を支援する「同郷人」がいた。

彼らは広東省の出身である。だが、『留東新聞』の張健冬等は四川省の出身、王瑞符は江蘇省の人である。こうしたことからその時どれだけ多くの留学生が引擎出版社、『現世界』半月刊に関係していたのかが頷けるであろう。

以下、私は事件後の『現世界』半月刊、引擎出版社について簡単に触れることで本稿の結びとしたい。

『現世界』半月刊は37年3月発行の第2巻第4期で停刊に追い込まれる。その経緯はこうである。

『現世界』半月刊は、37年2月1日発行の第1巻第12期が南京国民政府中央宣伝部の「密命」で発行禁止処分になった。それを知った胡一声は、自ら南京に出向き、国民党中央宣伝部長の方治に会い、抗議した。方治は、『現世界』半月刊を発禁にした理由を、「“反日を旨としている”が反共でない。文章を書いている人の多くもまた共産党だからだ」と言った。

それに対し、胡一声は、「われわれはすでに明確に表明している。我々は在外華僑を代表し、全民の団結、聯合抗日を主張している。掲載されている文章もすべて公けに募集したもので、投稿規定に合ってさえいればすべて掲載する」、「掲載すれば原稿料を支払うし、そこでは作者が何党か、どんな人かを問わない。国民党人がこれに遵って投稿してくれば、我々は歓迎する」、「現在海外華僑の抗日救国の熱情はいっそう強まっている。彼らの出版物に対し、愛国を語ることを禁止するならば、彼らは承知しないであろう。もし、あなた方がこの度の禁止命令を撤回しないならば、私は公にするしかなく、そうなればあなた方の華僑からの募金等々も難しくなるであろう」と反論した。そう言う胡一声に方治はその時、「戻って正式な（抗議の）申請書を書いてください。相談してみます」と言ったという（注81）。

それを受けた胡一声は、まもなくして発禁命令破棄の通知を受け取った。にもかかわらず『現世界』半月刊は停刊に追い込まれる。胡一声・丁裕はこう書いている。

国民党反動派がこの時使った手は本当に陰險だった。彼らはもう秘密の禁止令などを出さず、上海の各大新聞に『現世界』の広告を掲載してはならない、各書店、新聞売りに販売は許さない、郵便局、税関にその取り扱い、搬送はならないと通告を出し、ごろつきを使って露店や書店を破壊させた。このため『現世界』半月刊は続けていくことが出来なくなり、停刊するしかなかった（注82）。

こうして「愛国華僑」の手によって設立された中国近代出版史上初の出版社、引擎出版社が出した『現世界』半月刊は創刊から一年余で停刊を余儀なくされた。

それは盧溝橋事変の勃発によって日中戦争が全面化する約四ヶ月前、事態が上海に飛び火し、

第二次上海事変，八・一三事変が起き，やがて上海が「孤島化」する約半年前のことである。

【注】

(注1) 内務省警保局編『昭和12年度 外事警察概況』(龍溪書舎 1980年)「左傾抗日思想宣伝に従事せる留東新聞社員の斉検挙及同幹部の論旨送還」。

(注2) 「東京左連」，「芸術聚餐会」その他については拙著『1930年代中国人日本留学生文学・芸術活動史』(汲古書院 2010年11月)，『1930年代後期中国人日本留学生史文学・芸術活動史』(汲古書院 2011年12月)をご参照いただきたい。

(注3) 私は『留東新聞』をマイクロフィルムのかたちで購入し，さらに2014年3月北京大学図書館でそれを補った。ちなみに，『留東新聞』は「早稲田鶴区444 南州庵」，「早稲田鶴巻町59 東瀛閣」，「早稲田鶴巻町17 濱月楼」，「小石川区指ヶ町22 第二金来亭」，「本郷区追分町7 金来亭」，「杉並区高円寺7ノ94 東亜」，「杉並区高円寺7ノ947 東方閣」，「東中野上ノ原16 大東日語学院」，「中野区新井町600 日語学会」(『留東学報』第7期 35年10月18日「本報東京代鎖処」)など広範な場所で販売されていた。

(注4) 「創刊辞」(『留東新聞』創刊号 1935年6月12日)。

(注5) 「留日同学的播音室／「留東新聞」現已出版」(『留東学報』創刊号 1935年7月1日)。

(注6) 私が「張先奇」を「張健冬」のことではないかとする理由は，共に四川省の出身で，早稲田大学に学んでおり，創刊時から『留東新聞』に関わった人物としては張健冬以外に考えられないからである。

(注7) 常化知については「常化知さんへのインタビュー」(1998年1月3日 記録者水谷尚

子，藤原彰・姫田光義編『日中戦争 中国における日本人の反戦活動』青木書店 1999年8月)，中共泉州市委党史研究室編『中共泉州党史人物』(2001年)「常化知」の項など。

(注8) 常化知「『留東新聞』在東京」(『江安文史資料選輯・第5輯』1991年)。

(注9) (注8)に同じ。

(注10) 張安国口述・陳永嘉整理「傳襄謨事略」(中国人民政治協商會議四川省江安県委員会文史資料委員会編『江安文史資料選輯・第4輯』1988年)。

(注11) 簡伯邨「『留東新聞』——憶抗戰前的三份『留東』刊物」(複印報刊資料『現代史資料』1990年)。

(注12) 傳襄謨については，張安国口述・陳永嘉整理「傳襄謨事略」(前出)，『江安県志』(1998年)「傳襄謨」の項など。

(注13) (注10)に同じ。なお，張健冬，簡泰梁の来日時期については，昭和12年発行『特高外事月報』「入国居住送還関係」「二 中国人(満州国人)送還調(昭和12年1月中)に依る」。

(注14) 「中日新聞街」欄の「記事」(『留東新聞』創刊号 前出)。なお，呉□民の「□」は判読不能を示す。ここに見える人々のことは張致中を除いて何も分かっていない。

(注15) 柳澤伸司『新聞教育の原点——幕末・明治から占領期日本のジャーナリズムと教育』(世界思想社 2009年3月)。

(注16) (注8)に同じ。

(注17) (注8)に同じ。

(注18) 「昇格後之／中国大使館／内部無変動」(『留東新聞』創刊号 前出)。

(注19) 『留東学報』第1巻第4期(1936年1月1日) 羅俊(調製)「附録」「(一) 留日学生団体・代表・通信地址一覧(本年現在)」「第一類 已有出版物之学社(計七個)」の「註」。

(注20) 「本刊第一次作者座談会記録」(『留東

学報』第1巻第4期 前出)。

(注21) 内務省警保局編『昭和11年度 外事警察概況』(前出)「(二) 留学生発行に係る要注新聞雑誌」の「留東学報」の項。

(注22) 内務省警保局編『昭和11年度 外事警察概況』(前出)「(二) 留学生発行に係る要注新聞雑誌」の「留東新聞」の項。

(注23) 「『詩歌』二期出版」(『留東新聞』創刊号 前出)。

(注24) 「『雑文』二期将出版」(『留東新聞』創刊号 前出)。

(注25) 「青年文芸家／陳君冶之死」(『留東新聞』創刊号 前出)。

(注26) 郭沫若と「東京左連」の関係については拙著『1930年代中国人日本留学生文学・芸術活動史』(前出)の「第七章」などをご参照いただきたい。

(注27) 郭沫若「老生常談」(『留東新聞』創刊号 前出)。

(注28) 「敬告読者諸君」(『留東新聞』第3期 1935年4月1日)。

(注29) 紅野謙介『検閲と文学——1920年代の攻防』(河出書房新社 2009年10月)。

(注30) 秦太林「『東流』與『留東新聞』及其他」(『留東新聞』第10期 1935年11月1日)。この記事は「10月29日」に書かれた。秦太林については何も分からない。ただ、私も『留東新聞』の特に「副刊」を見ていて、編集していた張致中の性格であろうか、男女のことや女子留学生の記事、留学の便を図った情報などが多いと感じた。なお、一文にはこの後に続いて、「だが最近の(『留東新聞』)三、四期は大いに様変わりした」と記されている。

(注31) 「本報徵求訂戸啓事」(『留東新聞』第12期 1935年12月13日)。

(注32) (注8)に同じ。

(注33) 「本報特別啓事」(『留東新聞』第11期

1936年12月6日)。

(注34) (注8)に同じ。

(注35) (注10)に同じ。

(注36) 「『留東新聞』事件」に「『現世界』半月刊事件」が関係していることは、同系列ではあるが昭和12年発行『特高外事月報』「入国居住送還関係」「二、中国人(満州国人)送還調(昭和12年1月中)」からも確認出来る。

(注37) 「創刊辞」(『現世界』半月刊創刊号 1936年8月16日)。

(注38) 丁裕「回憶『現世界』雑誌和引擎出版社」(『出版史料』第5期 1986年6月)。

(注39) 胡一声・丁裕「關於『現世界』雑誌和引擎出版社」(『古旧書訊』1981年第1期)。

(注40) (注39)に同じ。

(注41) 『現世界』半月刊創刊号の「經售処」五社の最初に生活書店があるのもおそらくこのためであろう。なお『大衆生活』、『永生周刊』については『上海革命文化大事記』(上海書店出版社 1995年5月)などに依る。

(注42) (注39)に同じ。

(注43) 馮和法「憶不二書店」(『出版史料』第5期 1986年6月)、雑誌『今代文芸』、『東方文芸』など。

(注44) 「柳乃夫生年表」(『栄昌文史資料選輯』第7輯 2005年)など。

(注45) 郭雲雲、吳熾榮整理「献身革命的帰僑鄭天保」(『広東文史資料』第80輯 1998年)。

(注46) (注45)に同じ。

(注47) (注45)に同じ。

(注48) 楊凡「沈痛悼念老战友胡一声同志」(鐘秀英編『胡一声伝略 胡一声同志逝世一周年紀念』1993年)、陳松溪「蒲風与詩歌出版社」(『出版史料』1988年第3・4期 1988年9月)など。

(注49) 楊凡「沈痛悼念老战友胡一声同志」(前出)。

(注50) (注49)に同じ。

(注51) 来日後の蒲風のことは『蒲風選集上・下』(海峽出版社 1985年)や秋吉久紀夫の蒲風インタビューをもとにした蒲風関連論文などに詳しい。

(注52) 雷石楡の日本留学時代については雷石楡「重訪扶桑半紀後」(『新文学史料』1990年第4期)などに詳しい。『砂漠の歌』については北岡正子「雷石楡『砂漠の歌』——中国詩人の日本語詩集」(『日本中国学会報』第49集)などが、雷石楡の回想の日本語訳に池沢實芳等編訳『もう一度春に生活できることを——抵抗の浪漫主義詩人・雷石楡の半生』(潮流出版社 1995年8月)などがある。

(注53) 蒲風「天才損失年」悼聶耳」(『聶耳紀念集』1935年12月)など。

(注54) 陳松溪「蒲風与詩歌出版社」(前出)。

(注55) 内務省警保局編『昭和12年度 外事警察概況』(前出)「左傾反日宣伝出版物取次販売従事留學生の論旨送還」「饒一峯」の項。なお、次節本文に全文を引用してあるのでご参照いただきたい。

(注56) 内務省警保局編『昭和12年度 外事警察概況』(前出)「(三) 本国其の多より留學生宛郵送に係る反日又は共產主義宣伝物の」「(二) 国際教育」の項。

(注57) 日華学会学報部編『昭和十年六月現在留日學生名簿』の「東京帝大」の項には「姓名 年 省 県 学部科年級 出身学校 学費」の順で「廖鸞揚 二五 広東 梅 文学部大学院 昭和十年入学 中山大学 特選」と見える。

(注58) (注56) に同じ。

(注59) 郭沫若・蒲風「郭沫若詩作談」(『現世界』半月刊創刊号 前出), 胡一声「郭沫若与蒲風談作詩」(『新文学史料』1982年第4期)。

(注60) 「柳乃夫生平年表」(前出), 郭雲雲, 吳熾榮整理「献身革命的帰僑鄭天保」(前出)。

(注61) (注39) に同じ。

(注62) 『中国現代史詞典』(吉林文史出版社 1988年7月)「錢俊瑞」の項など。

(注63) (注39) に同じ。

(注64) (注39) に同じ。

(注65) (注39) に同じ。

(注66) 「李凡夫同志生平」(『李凡夫文集』1993年)。

(注67) 『胡愈之印象記』(中国友誼出版公司 1989年2月)など。

(注68) 「本報特別啓事」(『留東新聞』第33期 1936年5月15日)。

(注69) (注22) に同じ。

(注70) 残念ながら『留東新聞』は第4期から第6期までがいまもって欠けている。『留東新聞』は第3期(35年7月1日)までは「四六版八面四段」だが、第7期(35年10月11日)には「四六判四面九段」になっている。『留東新聞』はこの間に経済的事情などから「四六判四面」となったのであろう。

(注71) 「我們的工作——代発刊詞」『文化戦』第1期・『留東新聞』第35期(1936年5月29日)。

(注72) (注22) に同じ。

(注73) 日華学会学報部編『昭和十年六月現在留日學生名簿』「東亜学校」「王瑞符」の項には「王瑞符 二六 江蘇 塩城 専二ノ三 南京曉莊師範 自費」とある。

(注74) (注39) に同じ。

(注75) (注8) に同じ。

(注76) 簡伯村「懷念王芑生及国際問題研究所」(陳爾靖編『王芑生与台湾抗日志士』海峽學術出版社 2005年12月)

(注77) (注55) に同じ。

(注78) (注8) に同じ。

(注79) (注39) に同じ。

(注80) 内務省警保局編『昭和12年度 外事警察概況』(前出)「第三, 留學生に対する取締状況」, 「(二) 中国留學生論旨送還事例」, 「二,

左傾抗日思想の宣伝「熊琦」の項。

(注81) (注39) に同じ。

(注82) (注39) に同じ。